



お話を伺った先生方。
写真左から、稲垣眞人先生、
小澤祐介先生、上原一孝校長、
池田恭輔先生、福島 聡教頭。

地域の未来を担う人材 としての意識づけが必要

さいたま市立高校として、隣接する市立小・中学校や地域と日常的に交流してきた浦和南高校。市教育委員会の「特色ある学校づくり」計画では「地域連携型高校」に指定され、地域に根ざした学校づくりを進めてきた。地域の青少年育成活動に参加したり、小・中学生を対象に学習サポートや各部活動による星空観察、陶芸、書道、卓球、サッカーなどの教室を開いたり、生徒が地域とつながる機会も多くある。地域の人々からも「南高」の愛称で親しまれ、2018年度に17年ぶりに全国高校選手権大会に出場したサッカー部には、「地域を挙げて熱い声援を送っていただいた」と、同校に長年勤務する稲垣眞人先生。2019年度に着任した上原一孝校長は、こうした地域との連携が当たり前のように行われていることに驚いたという。

「大学進学や就職で東京をはじめ地域外に出ていく生徒が多いなか、自分

地域や小・中学校との交流を基盤に大学や企業とも連携。 体験型・探究型の活動を通して、 未来のコミュニティーリーダーとしての自覚を育む

の生まれ育った地域に誇りを持ち、貢献したいと思ってくれる人材を育てることが求められます。東京志向の強い首都圏内の地域だからこそ、より一層その仕掛けが必要だとも感じています。浦和南高校には、地域とのつながりが強いという素晴らしい伝統があります。これを一過性の交流で終わらせず、生徒の体験的・探究的な活動を拡充して学びを地域や社会と結びつけていくことで、未来のコミュニティーリーダーとしての意識づけをしていきたいと考えています（上原校長）

つながりがつながりと呼び、 外部との連携網が広がる

体験的・探究的な学びの機会として2003年度から希望者を対象に行っているのが、「社会探検工房」だ。夏休みを利用して企業や研究所、大学などを見学し、社会の第一線で活躍する人たちから話を聞く。例えば2019年度は、Yahoo、テレビ朝日、産業能率大学の3カ所を訪問。産業能率大学ではワークショップ形式でプレゼンテー

外部との連携による取組

小・中学校

- 虹色チャレンジスクール（小・中学生対象）
学習サポート、各クラブによる星空観察、陶芸、書道、卓球、サッカー教室など
- ジュニアインタープリター（小・中学生対象）

大学・研究機関

- ジュニアインタープリター（日本科学未来館）
- 海の生物学（東海大学海洋研究所）
- 大学出張講義（埼玉大学）
- 高大連携協定による受講・単位認定（埼玉大学、獨協大学）
- 社会探検工房（産業能率大学など）

企業・団体

- 社会探検工房
（Yahoo、テレビ朝日、小学館、読売新聞社、ソニー・ミュージックエンタテインメントなど）
- Sports-Tech & Business Lab
（49の企業、大学、自治体）

ションの手法を学び、それを活かして校内での報告会では自作のパワーポイント資料でプレゼンテーションを行った。見聞きしたことを将来の進路設計に役立てることに加え、論理的思考法や表現の手法を学ぶことも目的の一つだ。また、社会探検工房では日本科学未来館も訪れる。生徒が小・中学生を引率

して同館を訪れる「ジュニアインタープリター」プログラムの事前リサーチのためだ。「子どもたちに教えることで、生徒自身も深く考え、成長する。仲間と共に取り組み、自分たちで創造していく。まさに主体的・対話的・協働的な活動です」と、稲垣先生は言う。

東海大学海洋研究所の協力を得て



地域社会と協力し、生徒を育てる体制 /



開催される体験宿泊学習「海の生物学」や埼玉大学の生物系の教員による出張講義も、長く続く取組だ。担当する池田恭輔先生が「大変ありがたいことに、ジュニアインタープリターでつながりのあった日本科学未来館から東海大学海洋研究所を紹介していただき、さらに派生して埼玉大学の先生にも来ていただけることになった」と言うように、同校ではつながりをつなげてきつかけにどんどん外部との連携網を広げている。

探究ではグローバルな課題を地域の課題につなげ自分事として考える

高大連携も進んでいる。市立4高校は埼玉大学との連携協定を結んでおり、生徒は大学の授業を受講でき、単位も取得できる。キャンパスが離れてい



社会探検工房でYahooの社屋を訪れ、社員から事業や仕事内容の説明を受ける生徒たち(写真上)。深海魚ミズウオの胃を解剖して内容物を調査する、海の生物学の一幕。このときはビニール袋が発見された(写真左)。

という事情などから受講者は多くはないが、過去には単位を取得した生徒もいる。また、49の企業、大学、自治体に参加する「Sports・Talent & Business Lab」に、全国の高校で唯一参加。部活動の数値やプレーなどを科学的に分析し、非認知能力の伸びの測定や課題解決能力の育成に外部機関と協働して取り組んでいる。こうして地域だけでなく大学や企業などさまざまなステイクホルダーとの連携が進んでいるのが、同校の特色だ。

さらに、2018年度秋からは、総合的な探究の時間のカリキュラムを刷新し、国連の開発目標であるSDGsに取り組んでいる。グローバルな視点で提示された課題について、ローカルな課題とつなげる工夫がなされている。例え

「例えば探究で取り組んでいるSDGsなどは、グローバルとローカルをしっかりと関連づけていかないと、机上の空論になりかねません。そこをいかに結びつけ、さらに新しい学習指導要領に即したカリキュラムにしていくか、新しい大学入試への対応も含めて、模索しているところですよ」(小澤先生)

さいたま市では将来的にすべての小中学校をコミュニティスクールにする方針であり、それに先駆けて2019年度に同校がコミュニティスクール先進校に指定された。新たに学校や地域、行

ば、SDGsが掲げる目標の一つ、「産業と技術革新の基盤をつくろう」については、地震が起こってインフラが停止したと想定し、「皆さんはこの南高周辺の復興を担うリーダーです。インフラを回復させるにあたり、どれから復旧させますか」と問いかける。探究主担当の小澤祐介先生は、「ただ課題を知るだけでなく、批判的・協働的に思考し、最終的には、自分ならどうするか、自分には何ができるか、という創造的 thinkerにまで落とし込みたい」と話す。

新学習指導要領や新入試にどう位置付けていくかが課題

日頃からの地域との交流を土台に、外部との連携が進む浦和南高校。「新しい学習指導要領のもと、これまでの取組をどう位置付け、意味付けていくかが今後の課題」というのが、原校長はじめ先生たちの共通の見解だ。

「例えは探究で取り組んでいるSDGsなどは、グローバルとローカルをしっかりと関連づけていかないと、机上の空論になりかねません。そこをいかに結びつけ、さらに新しい学習指導要領に即したカリキュラムにしていくか、新しい大学入試への対応も含めて、模索しているところですよ」(小澤先生)

生徒's EYE

自ら一歩踏み出し、率先して行動することの大切さを学ぶ

政の関係者からなる協議会を設置し、高校の取組の報告や意見交換を定期的に行っている。「未来のコミュニティリーダーを育てるために、地域により開かれた学校を目指し、多様な外部の組織・人材と生徒とをつないでいきたい」と福島聡教頭は締めくくった。

● サッカー部が行っている地域の小学生向けのサッカー教室に参加しました。子どもたちに教えることで初心に返ることができ、コーチ陣の気持ちも少し理解できたように思います。こうした活動に参加するのは初めてでしたが、自分から一歩踏み出してみようと思えるようになり、夏にはサッカーの海外選抜遠征に挑戦しました。(加藤さん)

● 社会探検工房では、商品やサービスの作り手の話を聞き現場を見ることができ、とても興味深く刺激的でした。企業によって雰囲気も仕事内容もまったく違っていたので、就職する際には自分に合ったところを選ぶ必要があることを実感しました。また、情報の集め方や伝え方に試行錯誤しながら取り組んだジュニアインタープリターを通しては、自分から率先して行動する力が身についたと感じます。(越川さん)



左から、2学年の加藤 温さん、越川咲希さん。